

日韓の医学に及ぼした藤浪鑑の影響

—基礎医学と医史学を中心に—

李 桜源

ソウル大学校医科大学 人文医学教室

長引くコロナ禍の中、基礎医学や医史学への関心と需要がかつてないほど高まっている。早くも明治期から両者の重要性を強く認識し、研究・啓蒙活動を精力的に行った代表的な人物として、京都帝国大学医科大学の病理学教室初代教授を務めた藤浪鑑（1871～1934）が挙げられる。

藤浪は尾張藩医の家で生まれ、明治28（1895）年に東京帝国大学医科大学を卒業し、病理学教室の山極勝三郎教授に師事した。翌年ドイツに留学し、細胞病理学の始祖ウィルヒョウなどから近代病理学の精髓を学び、明治33（1900）年に帰国、京都帝大教授に就任した。周知のように、日本住血吸虫症の撲滅に貢献し、家鶏肉腫の移植系を確立するなど、卓越した医学的業績を残した藤浪は、一般病理学にとどまらず、地理病理学と医史学等の分野でも幅広い活躍をしており、その活動範囲もヨーロッパ、米国、台湾、満州、ブラジル等にまで及んでいる。

彼自身は医史学者ではなかったが、医史学への熱意は真剣なものであった。明治40（1907）年に京都医学会第4次総会で大規模な「医史材料陣列」を企画した。この展示を酷評した当時の医学界に対し、藤浪は「我邦医学界は斯くの如く済々たる歴史を有し乍ら、古今を通じて凡て是れ模倣のみ、輸入のみ」（「医史の教訓」（1909））だとして批判し、「時代」を度外視しては医学の発達はできないと反駁した。明治42（1909）年には富士川游（1865～1940）を京都帝大医科大学に招聘し、医学史の講義を実現させた。大正4（1915）年、富士川が『日本疾病史（上）』（1912）により医学博士の学位を取得できたのも藤浪の支援のおかげであったが、医学界の反発があった。藤浪はこれに対し、医史学は立派な学術的研究にして医学の一分野であり、実験研究にも歴史的知識が必要であることを強調した（「某生に与へて医史学を論ずるの書」（1915））。医史学は現在の医学的知識を充実させるのみならず、未来への進歩の方針までを示しており、医学の専門化が進むにつれ、それを総合・統括する医史学の存在意義は大きくなるとのことである。また昭和2（1927）年には、日本医史学会の発起人として実弟の藤浪剛一（1880～1942）とともに名を連ねている。

このような藤浪の学問的姿勢は、弟子の尹日善（ユン・イルソン、1896～1987）に受け継がれている。尹は大正12（1923）年に京都帝大医学部を卒業、病理学教室に入り、藤浪の後援のもと研究に邁進した。昭和3（1928）年、京城帝国大学医学部病理学教室の助教授になったが、翌年辞任し、セブランス医学専門学校の教授として研究および教育に尽力した。主な研究テーマはアナフィラキシーとホルモンとの関係や癌の統計調査であった。藤浪から多大な影響を受けた尹は、病理学者として韓国の基礎医学を開拓しながら、医史学の胎動にも深く関与した。昭和21（1946）年4月に自ら京城大学医学部で韓国初の医学史講義を行い、翌年4月には朝鮮医史学会（大韓医史学会）の初代理事長を務めた。なお、同年9月、ソウル大学校医科大学に東アジア初の医史学教室（現・人文医学教室）を設置することにも貢献した。以後、昭和29（1954）年に大韓民国学術院会長（初代～第6代）、昭和31（1956）年にはソウル大学校総長（第6代）に就任し、韓国の学術全般を牽引した。

以上のように、藤浪鑑は日本だけでなく、韓国においても基礎医学・医史学の発展に寄与したといえる。生誕150周年を迎え、彼の功績をたたえたい。最後に、京都大学医学部資料館の資料をご提供くださった京都大学の日合弘名誉教授に感謝の意を表す。